

日本には、全国津々浦々にお寺があり、そのお参りの道として「参道」があります。お寺の本堂をお参りする際に必ず通ることになりますので、この参道を一步ずつ歩むほど、本堂に至るまでの期待が高まっていきます。

山深いお寺にお参りをするときには、山を切り開いた参道の両脇に木立が連なり、自然がはぐくむ木々の大きさに圧倒されます。町中にあるのは、一步参道に入ると世間の喧騒を離れて、次第に静かな気持ちになっていきます。観光地では、参道にお土産物屋さんが軒を連ね、参拝者の旅の労をねぎらってくれます。

いずれにせよ、参道を通ることによって、自分が別のところからこの地を訪れているということを実感するのです。

大本山永平寺の参道には、「杓底一残水、汲流千億人」

(しゃくていのいちざんすい、ながれをくむせんおくのひと)

と書かれた石柱が建てられています。この言葉は、永平寺第七十三代目の住職であった熊澤泰禅師の漢詩から引用されています。この詩は、道元禅師が川の水をその流れから柄杓に汲み、必要な分を使って、残った水を捨てずに川に戻したという説話にちなんだものです。

柄杓に残ったわずかな水であっても、元の川の流れに戻ることによって、多くの人々がその恩恵に与ることができます。山に住む人も麓に住む人も、互いに自然の恵みの恩恵を分かち合っているのです。

今では水道の蛇口をひねればじゃぶじゃぶと水を使えますが、時代をさかのぼれば、街中では水を売る水屋さんが活躍をしていたそうで、山であっても水を確保することは難しかったことでしょう。

修行道場では、貴重な水を多くの修行僧たちが大切に分かち合い無駄にしないように生活をしています。自分の身に必要な量がわからなければ、分かち合うこともできません。分かち合いの心を持つことで、自分に必要の無い水を他の人のために戻すことができるのです。

参道を歩くと山門が見えてきます。それは、己を知り、他の人を想い、ともに修行をする世界への門なのです。

仏に向かって歩みを進めつつ、わが身の在り方を振り返る道が、参道であると言えるのではないのでしょうか。